「この波が凪ぐ時まで」

山田えみこ

人物

長谷川　博己（47）刑事
吉田　鋼太郎（66）殺し屋

○海岸の湾（早朝）

夜が明けてゆく。

水平線は、空との境目が明るくなっていく。

明けの明星。

潮は、遠くまで引いており、海岸には、ちいさな岩がゴロゴロ現れた、ゴツゴツとした湾である。

まだ、暗い波間。

波の音がする。

所々に残った水たまりに、白い泡が立っている。

水たまりの際のちいさなカニが、口から泡を吹いている。

カニを波がさらっていく。

波の音。

水たまりの一つに、長谷川博己（47）の片方のショートブーツが、音を立てて踏み込む。

長谷川、明けゆく空をバックに、息も

切れ切れに、怒りの表情で。
長谷川「吉田鋼太郎、ここまでだ」
長谷川の向こう、沖に向かう海岸に、
わずかな潮に、足を浸からせながら、
吉田鋼太郎（66）が、仁王立ちに立
ち尽くしている。息も切れ切れに。
二人、向き合っている。
にらみ合い。
二人の左腕は、手錠でつながれている
が、手錠の輪と輪の間は長い鎖でつな
がれている。
吉田「ふん！お前のような、お子様ランチか
ら卒業できない奴に、ここで、俺がやられ
るとはな！」
吉田、長い鎖を指差し、
吉田「お前の、この長い鎖はなんだ⁉ふざけ
てんのか⁉」
長谷川「俺のあこがれの、銭形刑事にあやか
って、だ」
吉田「なにぃ？つくづくふざけやがって！今

度は、おこちゃまアニメか！」
長谷川、不敵な笑みを浮かべながら、
長谷川「お前も、ここで終わりだな。伝説の殺し屋、吉田鋼太郎、お前をいたぶるために、わざわざ長くしてんのさ！」
長谷川、突然、吉田に掴みかかる。
二人、海岸で、取っ組み合いの格闘を始める。
水飛沫を上げながら、闘い続ける二人。
水平線がどんどん明るくなっていく。
二人、もみ合いながら、
吉田「なんだよ！警察に連れて行かないのか!?」
長谷川「はん！甘いな！お前は、ここで葬ってやるよ！」
と、掴みかかり、闘い続ける。
吉田「刑事のくせに！法律に反するぞ！」
と、吉田、思い切り長谷川を蹴倒す。
長谷川、激しく頭を岩にぶつける。
長谷川「うわぁー!!」

額から血を流し、ふらふらと立ち上がる。
額から、流れた血を手で拭き取り、手に付いた血を見て、長谷川、逆上する。
長谷川「お前に言われたかねぇー！この殺し屋ァ！」
長谷川、ふらふらと立ち上がり、吉田の首に掴みかかる。海岸に押し倒す。
どしゃーん、と、激しく飛沫をあげる潮水。
吉田に馬乗りになる。
長谷川、吉田の首を憎々し気に締める。
長谷川「お前はなぁー！俺の親父をなぶり殺しにしたんだろ!?」
吉田「は!?」
長谷川「長谷川初範は、俺の親父だー!!」
長谷川、頭をふらふらさせながら、
吉田「長谷川初範？」
吉田、首根っこを押さえられ、首を絞められながら、長谷川を見つめている。

長谷川「お前を追い詰めて、仕返しするため
に、俺は、何年」
吉田、長谷川を見つめ、
吉田「お前、長谷川刑事の？」
長谷川「そうだ！息子だ」
吉田「お前が」
吉田、遠い目で、長谷川を見つめる。
長谷川、それに気づき、一瞬、首を絞
める手が止まりかけるが、続ける。
吉田「お前が」
吉田、目を閉じそうになり、苦しそう
だが、言い続ける。
吉田「お前、勘違いをしている」
長谷川の顔アップ。
首を絞める手は緩めない。
吉田「お前は、勘違いをしているよ」
長谷川「な、なんだとぉー？」
吉田「長谷川刑事、お前の父親は、自分で足
をすべらしたんだ」
長谷川「なに!?」

吉田「俺の仲間を助けるために、女だったから、崖から落ちそうになっているのを、助けようとして、自分で、足を滑らしたんだ」
長谷川「なんだとー？いい加減なことをぬかすなー!!」
吉田「弱いものには、とことん優しいデカだった。容疑者でも。俺の女は、助けられて、お前の親父に」
　吉田、首を絞められながら、
吉田「俺は、必死で助けようとしたんだ。お前の親父を、けれど」
　吉田、苦渋の表情を浮かべる。
吉田「お前の親父は、崖から落ちて死んだ」
　吉田、苦しそうに語る。
長谷川「うそだー!!」
　吉田、抵抗するのを止める。
吉田「俺の女は助かった。でも……俺は、あのデカの息子になら」
　吉田、優しい表情になり、
吉田「殺されてもいいな」

吉田、無抵抗になる。
長谷川、一瞬、手を止め、目を見開き
吉田を見つめるが、
長谷川「わー!!」
思いっきって首を絞める。
首を絞められながら、吉田、目を軽く
閉じ、無抵抗のまま。
満ちていく水が吉田を沈めていく。
首、顎、口元。
長谷川、怖い顔で、吉田を睨み続ける。
ふっと、長谷川、くらくらと意識が飛
んで、その場に倒れ込む。
吉田、岩にもたれかかったまま、意識
なく、満ちてゆく潮に沈んでいく。
同じく、近くの岩場にもたれ、満ちて
ゆく潮に沈んでいく長谷川。
二人の体が、潮に沈んでいく。
明けていく空。
太陽が昇っていく。
波の音。

口元、鼻元まで海水に浸かる長谷川。
意識を失ったまま、鼻元、目元まで海水に浸かる吉田。
波の音。
昇る太陽。
ウミネコが飛んでいく。
ウミネコの鳴き声。
吉田の手元には、海面下にやすりが光っている。

○成田空港・構内
乗客や、その見送り、クルーでごった返す。
スーツケースを転がす乗客の間を、子供たちが、ふざけて鬼ごっこをしている。
子供たちが駆けていく。
場内アナウンスが流れ、掲示板の表示が、次々と変わって案内する。
吉田の後ろ姿が現れ、場内をスーツケ

ースを転がして歩いていく。
吉田、売店の前で立ち止まる。
酒の缶を手に取って買おうとする。
吉田「お姉さん、これね」
と、ＩＣカードをタッチする。
売店の販売人が、イカの干物や、塩辛を勧めるが、気が付いて、
吉田「いや、もう、塩辛いのは、いいよ」
と、手をあげて、首を振りながら断る。
吉田、笑顔で酒を手にして去っていく。
乗客で、ごった返す場内。
あちこちに、乗客の顔、顔、顔。
場内を行き交う人、人、人。
場内アナウンス。
空港の片隅の柱のたもとに、人影。
吉田の後ろ姿を見送っている。
頭に包帯を巻いた、人影は長谷川。
柱の陰に佇んでいる。
苦笑いを浮かべて、吉田を見送っている。

吉田が、搭乗ゲートから、飛行機の連絡橋に消えると、
苦笑いを浮かべたまま、長谷川もその場を立ち去る。

おわり